

献呈の辞

学部学生が卒業論文の提出を終え、口述試験も終わると、ゼミナールで議論した学生たちももうすぐ卒業していくのだという感慨にとらわれます。それ以上に、長い間ともに同僚として働き、あるいはさまざまな教をいただいていた先輩のご退職の 때가 近づくとつれ、その寂寥感はいやまに強まってまいります。文学部の時代を合わせて30年間の長きにわたって本学に在職された廣田康生教授が2019年3月末をもちましてご定年で退職されることは、本当に残念です。以下先生の略歴をご紹介しますとともに、個人的な思い出を記すことで、廣田康生教授退職記念号の献呈の辞とさせていただきます。

廣田康生先生は1949年に宮城県でお生まれになり、立教大学で経済学を修められ、その後新聞社に勤務されました。しかし学問への想いを断ちがたく学究の道を志し、立教大学大学院で社会学を修められました。専修大学文学部に専任講師として着任されたのは1988年で、爾来30年余間にわたり文学部人文学科社会学コース、同社会学専攻、そしてご自身が設立に深く関与された人間科学部社会学科に所属され、社会学科長さらには大学院文学研究科長など重要なポストを歴任されてきました。

廣田先生の主要な研究領域は都市社会学ですが、その理論的背景は一貫してシカゴ学派にあり、特に都市とエスニシティというテーマに焦点を定めてこられました。日本社会への大量の外国人流入を見越したかのような先見性のあるご研究でした。先生の研究は地道なフィールドワークとシカゴ学派の理論研究の統一によるものであり、極めて正統的なスタイルを継続されてきました。その研究成果は後に掲載されている履歴・業績一覧をご覧ください。

廣田先生との思い出は尽きませんが、ここでは昔の苦労話に絞ってご紹介したいと思います。廣田先生が着任されたころには社会学コースは毎年100人前後の学生を抱える大所帯で、確か廣田先生は5人目の増員人事、私が6人目の増員人事だったと記憶しています。その当時は、専修社会学会が設立され、『専修社会学』という紀要が発刊されたばかりの頃でした。また大学院として文学研究科が設置されるという本学の社会学教員組織にとっての大きな変革期も経験しました。大学院の設置申請をするためには、図書館に所蔵してある社会学関係の文献リストを作成しなければならなかったのですが、それを文献カードからいちいち調べだしてワープロに入力するのが若手教員の仕事でした。またワープロ専用機がようやく普及しはじめた時代でしたので、『専修社会学』の版下を作成するという地道な作業をご一緒したことも少なからずありました。8号館の研究室を共用させていただいたということもあり、その誠実なお人柄には感銘を受けました。それでも今からすればのどかな時代だったと思えてなりません。

専修社会学に一時代を築かれた廣田先生が今年度をもって教壇を去られることは社会学科にとって大きな痛手です。しかし先生が専修大学に残していられる社会学的な土壌の上に、社会学科がしっかりと根を張り、豊かな枝を伸ばしていくことをお約束して、『人間科学論集社会学篇』廣田康生教授退職記念号への献呈の辞とさせていただきます。

平成31年3月

専修大学人間科学部長 嶋 根 克 己